

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13469

研究課題名（和文）コーパスを活用した係り結びの通時的研究の展開

研究課題名（英文）Development of a corpus-based diachronic study on kakari-musubi

研究代表者

鴻野 知暁 (KONO, Tomoaki)

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：30751515

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：上代から中世の資料についてコーパスを活用した係り結びの研究を行った。国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」のデータに係り結びの情報を付与する基準を策定した。実際にコーパスデータに情報を付与した後、形態論情報と組み合わせることにより、広範な資料に関する通時的な分析を行った。作成したデータの一部は研究者が利用できるよう公開した。コソの係り結びの中で逆接句となるものに注目し、その逆接性について論じた。また、係助詞の出現位置などについて構文的な観点から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来詳しく検討されてこなかったコソの係り結びの逆接性について、特にその譲歩的な性質を明らかにした。連体形に付くナリが他の助動詞と複合することで係助詞の結びになることができるといった、これまで知られていなかった事実を提示した。「日本語歴史コーパス」には、係り結びのような呼応に関する情報は付与されておらず、遠く離れた呼応関係を検索することは困難であったが、本研究で構築・公開したデータベースを併用することで、係り結びの調査を容易に行えるようになった。本研究で示した情報付与の方法は、副詞と述語の呼応といった他の呼応現象にも応用可能である。

研究成果の概要（英文）：This project conducted corpus-based research on materials from the Old Ages to the Middle Ages. I have developed criteria for assigning information to the data of the Corpus of Historical Japanese, which is being constructed by the National Institute for Japanese Language and Linguistics. We added information to the corpus data and then combined it with morphological information to make a diachronic analysis of a wide range of materials. A part of the data generated by this study was made publicly available for researchers. We focused on adversative clauses of koso and discussed its linguistic character. The position of kakari particles was argued from a structural point of view.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 係り結び コーパス アノテーション

1. 研究開始当初の背景

上代から中世の日本語では、係助詞と述語の活用形とが呼応する「係り結び」と呼ばれる強調表現が使用されていたが、時代が下ると呼応が乱れた例も見られ、近世で係り結びは消滅した。係り結びの発達そして崩壊は、非常に長い期間にわたる文法上の変化であること、述語の活用形に関わり文構造全体を決定すること、という二点から重要なテーマとして研究されてきた。

本研究代表者は、これまで、係り句の長さや係助詞が文中で占める位置などに着目して研究していたが、その研究は特定の係助詞に関するものであり、かつ、上代から中古の時代の一部の資料を対象としており調査範囲が限られていた。これまでの研究の結論を補強し発展させていくためには調査対象の範囲の拡大が必須であるが、係り結びは用例数が非常に多く、用例の抽出・整理にかかるコストが大きいたことが難点であった。上代から中世の幅広い資料を対象とした通時的な研究を円滑に行うために、電子化された資料に様々な言語学的情報を付与したコーパスを利用することが考えられる。

2. 研究の目的

国立国語研究所で開発されている「日本語歴史コーパス」は、奈良時代から近現代までの主な資料を収録した非常に有用なコーパスであるが、これには係り結びのように離れた位置の呼応関係についての情報は付されていない。本研究では「日本語歴史コーパス」から抽出したデータに係り結びの情報を付与する。このことで、上代から中世期までの幅広い資料の係り結びの用例を、効率的かつ網羅的に調査し分析することを目的とする。具体的には、コーパス内の形態論情報を活用することで、係り句と結び句との間に介在する接続助詞の分布、係り結び文とそうでない文との文末述語の様相、といった事柄に着目して分析を行う。

3. 研究の方法

係り結びに関係する基本的な情報として、長単位をベースとした係り句と結び句の範囲、係助詞と共起する疑問語、係り結びとその後続句との接続関係(「逆接」など)といったものを、「日本語歴史コーパス」から出力した長単位データに付与することを試みた。係り結びの異例をどう処理するかを検討しつつ、作業による情報の入力、および、研究代表者による確認作業を行った。平安時代編では『源氏物語』の他、『竹取物語』、『枕草子』、『土佐日記』、『古今和歌集』、『大鏡』の中古和文資料計6作品の係り結びの情報付与を実施した。続いて時代を広げ、奈良時代編では『万葉集』、鎌倉時代編では『今昔物語集本朝部』、『宇治拾遺物語』、『とはずがたり』の計3作品を対象に情報を付与した。作成したもののうち、『古今和歌集』・『大鏡』・『とはずがたり』の3作品について、researchmap上にてデータを公開した。

上記は係り結びに関する基本的かつ汎用的な情報が付いたものであるが、さらに詳細なものとして以下2つのデータベースを作成し、研究に活用した。第一に、『源氏物語』と『万葉集』について、テ節・連体修飾節・条件節の中に疑問の係助詞が現れた場合、どのような構文型を取るかということデータベースとして整理した。第二に、「日本語歴史コーパス」中、平安時代編全作品(16作品)、鎌倉時代編全作品(10作品)、さらに和歌集編全作品(8作品)を対象とし、活用語に承接する助動詞ナリ(連体形承接のもの、終止形承接のもの)について調査した。助動詞ナリに関わる形態論情報に、先に作成済みの係り結びの情報を組み合わせたデータベースを作成した。

4. 研究成果

(A) 逆接句の意味分類と、コソの係り結びの表す逆接性について

コソの係り結びの逆接性を考察するに先立ち、「期待」という心理的な概念を軸として逆接句一般の意味分類を行った。言語主体の期待が否定される「意外的逆接」、言語主体が期待を否定する「拒否的逆接」、期待性が認められない「対比的逆接」と三つに分類した。この上で、コソの係り結びは対比的逆接を表さないことを主張した。

拒否的逆接となるコソの係り結びの中で、修辭的に「予防論法」を基調とするものについて論じた。これは、自分にとって不利な事柄を相手が持ち出すことを想定し、それを譲歩的に容認するものの、コソによって特殊な例外として退けるものである。自らの主張が言語化されていない文、直接の因果関係が存在しない条件文、二重逆接といった、万葉集中の独特な表現について、コソの働きを見た。

(B) 疑問詞疑問文における係助詞カとゾの出現位置について

奈良時代から平安時代にかけて、疑問詞疑問文に関する構文パターンがどのように変化していったかを調べた。古代日本語では、係助詞のカとゾが疑問語の後ろに現れるが、これらの助動詞は、疑問語に直接付くとは限らない。中には、疑問語が従属節の中に現われ、カとゾがその節の外側に位置することがある。

奈良から平安時代にわたって、「[疑問語～連用形]テ+カ/ゾ～」と「[疑問語～連体形]名詞

句+カ/ゾ~」という構造が認められる。奈良時代には、係助詞はしばしば疑問語を伴う条件節（「疑問語~未然形+バ」/「疑問語~已然形」）に付与されたが、平安時代にはこの構造は非常にまれである。平安時代の疑問詞疑問文の特徴は、カとゾが文末に近い位置に現われることであり、これらの係助詞は、疑問のスキープの末尾であることを表していると考えられる。

(C) 詠嘆的用法のモと、モが注釈的に働く構文について

古代日本語で、形容詞に助詞のモが接続した形式がどのような構文と結びつくかを整理し、その中で「形容詞終止形+モ」、「形容詞連用形+モ...カ/カナ」といった詠嘆を表わす構文について考察した。「形容詞連用形+モ...カ/カナ」において、モに上接する部分は「逆述語」として捉えることのできる場合があり、「注釈 被注釈」という構文型の一つとして考えることができる。この文構造のあり方について、係り結びとの類似性を主張した。

(D) 助動詞ナリと係り結びとの関係について

古代日本語において、終止形に接続するナリ(終止ナリ)と連体形に接続するナリ(連体ナリ)とが構文的に異なるふるまいを示すことが先行研究で指摘されてきた。たとえば、終止ナリは係助詞ゾ・ナム・ヤ・カ・コソの結びになり、活用が変化するが、連体ナリはこれらの係助詞の結びにならないことが知られている。しかし、本研究の調査で、連体ナリの複合形式についてこのことが当てはまらないことが分かった。

具体的に以下のことを明らかにした。第一に、連体ナリが他の助動詞と複合してナラム・ナルラムのような形になると、係助詞「ゾ・ナム・ヤ・カ・コソ」の結びになることができる。また、連体ナリの複合形式が疑問詞の結びになっている例が相当数認められる。第二に、「疑問詞+ノ・ガ(主格)~ナラム・ナルラム」の構文で、「疑問詞+ノ・ガ(主格)」は、ナリの前の準体句の中におさまっていると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 鴻野知暁
2. 発表標題 他の助動詞と複合した終止ナリ・連体ナリの構文現象
3. 学会等名 「通時コーパス」シンポジウム2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鴻野知暁
2. 発表標題 逆接句の意味分類
3. 学会等名 令和元年度東京大学国語研究室会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鴻野知暁
2. 発表標題 古代語の「形容詞 + モ」に関わる構文とその機能
3. 学会等名 「通時コーパス」シンポジウム2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鴻野知暁
2. 発表標題 疑問詞疑問文におけるカとゾの出現位置について
3. 学会等名 NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鴻野知暁
2. 発表標題 逆接句として働くコソの係り結びの修辞性
3. 学会等名 萬葉学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関